

6 永明寺と大山道道標

県道瀬谷・柏尾線バス停「岡津橋」の先を左折し、不動橋を渡ると岡津山永明寺がある。曹洞宗大本山総持寺の孫末寺で、本尊として聖観世音菩薩木立像を安置している。



本堂前から山門・鐘楼を望む

本尊の台座に書かれている文字や寺の古文書によれば、天文十一年（一五四二）、「岡津郷領主太田越前守入道宗真」の創立とある。入道宗真は、寺伝によれば太田道灌の孫とされ、祖父道灌の菩提を供養するために道灌を永明寺の開創の祖として勧請している。

また、江戸期に入り、当地の領主黒田直綱の跡を継いだ用綱はこの寺の復興に尽力し、「玄融院殿泰獄道安居士」という戒名がつけら

れ、中興の祖として供養されている。

大正十二年（一九二三）の関東大震災の時、裏山と堂宇が崩壊し、岡津町一六一六番地に移転したが、周囲の開発と阿久和川の氾濫の影響もあり、長年の願いが実って旧跡地山上（現在地）に、本堂や慈母大観音菩薩像、その他の伽藍が建立され、平成四年に諸堂が落成した。震災後移転建立された所は別院となった。

（正面）（不動明王像）庚申供養 大山道
 （左面）享保十乙巳十一月吉日
 （右面）右 ほしのやみち

大山道を歩く人が必ず足を止めるのが永明寺別院門前にある「大山道道標」である。大山道を歩く人は、ここを起点に、西田谷戸へと足を進めるのが良い。戦没者慰霊碑の前をしばらく行くと、左側に「下り かしを道、上り 大山道」と記された道標を兼ねた地神塔が立っている。西が岡住宅開発の時、

岡津町二〇
 ○四番地付
 近にあった
 ものを移転
 した。



大山道道標

7 戦没者慰霊の忠魂碑 ちゆうこんひ

岡津町の永明寺別院前の大山道沿いに、石段で登る小高い公園風の広場があるが、その広場の一段高いところに、大正元年（一九一二年）十一月に建立した寺内正毅陸軍大将揮毫による忠魂碑がある。仙台石を使用した台石まで入れると、高さは5mを優に越す大変立派なものである。連合軍の命令で撤去処分された忠魂碑の多い中で、建立時の姿をそのまま残しているこの忠魂碑は、市内でも他に例がなく貴重な存在である。

明治の末期から大正の初期にかけて、各地で忠魂碑や忠魂塔の建立が行われたが、大正元年当時、中川村の村長新井海蔵と助役の石川兼次郎、また土地を提供した岸井彦八ら村の有志が、建碑のための啓蒙や募財活動等を熱心に行った。特に石川兼次郎は建碑用地の折衝や建立の準備等で奔走した。

終戦直後、連合軍の最高司令部から、戦没者や軍国主義者を讃える忠魂碑を即時撤去せよという指令が出された。このため殆どの地区が、それまで大事に守り慰霊を続けてきた忠魂碑を、破壊または土中に埋めるなど、指令通りの撤去をされており、中和田地区でも碑面を割って指令に

従っている。

しかし中川地区の場合、司令部からの即時撤去の通知がなぜか遅れた。通知を受けたときは撤去期限日まで三日しかなかったため、撤去作業をする暇がなかったことや、碑のある場所が県道から離れているので、GHQの査察は免れるだろうと当時岡津小学校後援会会長だった石川金正氏や、通知を受けた岡津小学校校長石井直吉氏らが判断したことから、この忠魂碑は残されたのである。石川金正氏は、もし連合軍からとがめられたら、戦争犯罪人になってもいい、責任は私が一人でとると石井直吉氏に伝え、碑の保全に身を挺する覚悟をしたという。



忠魂碑